

県内有数の採種圃場 二井田種子生産組合

二井田には、水稲の種子をとるための圃場、採種圃があります。採種圃は県産米改良協会が設置しているもので、県知事の認可を得た採種圃は全県に十カ所、県北には大館と能代の二カ所に設けられています。

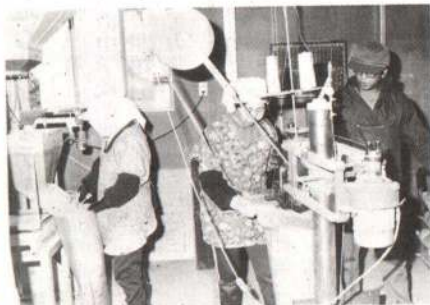
二井田種子生産組合は、昭和三十五年頃、肥沃な土質と平坦な地形という採種圃としての好条件を備えていたことから県の認可を受けスタートしました。同組合は荒谷慶一組合長をはじめ三十人の篤農家が構成されており、組合員はいずれも稲作についてのベテランばかりです。

調整をしていますが、今はコンバイン十台、脱穀機十台を共同利用し、水稲種子団地育成事業により建設された籾乾燥調整施設で調整作業を行っています。

種子用の米穀は、普通栽培されている米穀よりもずっと検査基準が厳しいため、異品種、異物は徹底的に除去され、病害虫の防除にも細心の注意が払われるという点と、さらに商品価値を高めるために倒伏しないよう多収化を避け、早めに収穫して種子に光沢を出させるなど、いろいろな面でキメ細かな肥培管理が要求されるといえます。同組合では、六十一年産米のアキヒカリが夏場の低温障害のため一度だけ検査不合格となったのみで、全県的に優良採種圃として

高い評価を得ています。

「重要な種子の更新を図るため今年には五〇ヘクタールに三品種を契約栽培しました。苦勞も少なくありませんが、何よりうれしのは県内各地へ自分たちが作った種子を供給しているというプライドを持って栽培ができるという点です」と荒谷組合長は組合員の皆さんを代表して話してくれました。



▲種子用米を袋詰めする組合員

ちびっこギャラリー おとうさん



おうまさんになってくれたり、ドラマゴッコであそんでくれます。



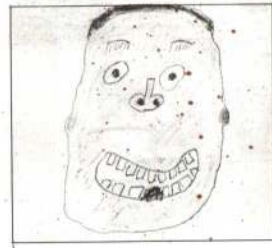
おがさわら けんいちくん



おざわ たかしくん



おとうさんちよっとおこりんぼだけど、すきです。



かいしゃへいってるとおとうさん。もつといっしょにあそんでね。



ながた ゆうやくん

二井田保育所

たずね歩き

温泉寺の 名兵衛地蔵

二井田の温泉寺の入口に高さ二層近い石地蔵が立っています。伝えによると「さいのかわら」の地蔵をかたどったものといわれ、ムラでは子どもが亡くなったときに、さいの河原で待っているこの地蔵が、地獄の鬼から守ってくれるという点で、親に先だって子どもが亡くなったときはこの地蔵にお祈りします。この地蔵の背中には、「元禄十二年五月二十四日施主細田屋名兵衛」と刻まれています。

細田屋名兵衛は、今から二九〇年ほど昔、二井田に住んでいた大金持ちの大阪商人で、二井田から米を尾



去沢の鉾山へ運び、鉾山から鉾石を積んで米代川を能代へ下って商売をして長者になったといえられていました。そして、自分が出世したのには仏様の信仰によるものだと考え、自分の守本尊を信じてわざわざ大変な費用をかけて故郷の四国から石材をとり寄せ、二層近い地蔵を刻ませて温泉寺に寄進したといわれます。それで今もムラの人たちは、この地蔵を名兵衛地蔵と呼んでいます。

人物登場

阿仁の川下り 一連覇達成

安達 英樹さん(下村) 松田 正博さん(館)

安達さんと松田さんがコンビを組んで、初めて川下りに挑戦したのは五年前。「隣りの家の人が以前出場したときの話を聞いて、ひとつやってみようじゃないかということになって」と安達さん。初出場の年は、ボート操作や流れに乗るコツがつかめず十四位に終わったものの、二年目からは実力を発揮、県内外から集まる百チーム余りの強豪を尻目に常に三位以内に入賞し、去年、今年と二年連続優勝に輝きました。

去年からは鹿角市で開催されてい



▲安達さん(左)と松田さん(右)

る川下りにも招待されて出場しているお二人ですが、「大館にも長木川、米代川という川があるのに、こういうイベントがないのは残念。いつか大館から能代までの大レースを開催して欲しいですね」と大館にレースがないのを残念がっていました。お二人は今三十七歳。「川下りは意外と重労働。でも四十歳まではやりますよ」と意欲満々でした。

◇次回は下川沿地区編をお送りします。